

8K放送

カウントダウン②

2016年の8K試験放送開始に向け
突き進む技術開発等の
最新動向をシリーズで追う。

NHKが次世代放送サービスの中核と位置づけて研究を重ねてきた8Kスーパーハイビジョン(以下 8K)。2020年の東京オリンピック・パラリンピックという明確な目標に向かって、今まさに飛躍の時を迎えている。今回はNHK理事・技師長の浜田泰人氏に、8K放送サービスの実用化に向けた道筋、そして最新動向などを語ってもらった。なお、シリーズ①は、さっぽろ雪まつり8Kライブパブリックビューイングを実現した「生カメラ+生中継+非圧縮」の8K無線伝送装置(FPU)技術をレポートしている(4月号)。

●構成：高瀬徹朗・本誌特別レポーター、写真：川津貴信

NHK理事・技師長 浜田泰人氏が語る

Hamada Yasuto

8Kスーパーハイビジョン放送の 実現に向けた技術展望

NHK各放送局で 「8K放送」を体感

— 8K放送に向けた準備状況についてお聞かせください。

浜田 昨年9月に公表された総務省の「4K・8Kロードマップに関するフォローアップ会合」の中間報告により、目指すべき目標がより明確なものとなりました。また、今年1月にお示しした「NHKビジョン2015→2020」においても2020年に向けて世界最高水準の放送・サービスの実現を目指すことを明記しています。NHKは、8Kの研究開発を加速させるとともに設備整備に取り組んでおり、試験放送に向けた送出や送信の設備整備を今まさに進めているところです。また、試験放送の開始に合わせて、全国の

NHK放送局のエントランスなどで8K放送を体感していただけるように、受信装置を設置することも検討していきたいと思えます。

— 「8K街頭テレビ」の展開ということですか。

浜田 先日開催された「さっぽろ雪まつり」において、ライブパブリックビューイングを実施しました。NHK札幌放送局に350インチのスクリーンと85インチのディスプレイを用意し、来場者に8Kをご覧いただきました。会場に来てくださった方からは「映像と音がすごい迫力ですね」、「本物みたい」といった感激の声をいただきました。このように、イベントなどの場も通じて、8Kの高臨場感を体験していただける機会を設けていきたいと考えています。

技術課題解決へ向けて 取り組みを強化

— ロードマップの中間報告を受けて、技術面の課題をどう整理されていますか。

浜田 大きく2つの課題が挙げられます。ひとつは、「2018年以降の伝送路について」で、もうひとつが「受信機開発の見通し」です。

— 伝送路の課題とは何ですか。

浜田 8K試験放送については、衛星セーフティネット終了後のトラポン(BS17チャンネル)を利用することになります。このトラポン1つでは、8Kで1チャンネル分、4Kで最大3チャンネル分しか確保できません。そこで、現在利用されていない衛星の左旋円偏波(偶数チャンネル)